

研究ノート

# 法華経はいかにして行じられてきたか

——成仏論検討の為の覚え書き——

大 乗 文 晴

## 一、はじめに

宗教の目的は何であろうか。

一般には幸福の追求ではないだろうか。何の為に祈るのか。殆どの人々は、宗教実践の結果として幸福を求める。或いは不幸からの脱却を宗教に求めている。救いであるとか、癒しであるとか、何れにせよ現世安穩を求めていることには違いがない。

この社会の要請に対する我が宗門の答えは、日蓮宗宗憲を照らして見ると「日蓮宗の目的」として次のように謳っている。

日蓮宗は、本門の本尊を帰依の正境とし、本門の題目を信行の要法とし、本門の戒壇を依止の戒法とする三大秘法を宗旨として、法華経を行じ且つあらゆる思想を開顕して妙法に帰せしめ、もって即身成仏、仏国土顕現を理想とする。

(日蓮宗第二条・宗旨)

つまり法華経を行じて「即身成仏」「仏国土顕現」が理想だ、と確と謳っているのだ。

「即身成仏」を論じる上で問題となるのは、そもそも成仏とはどういう状態のことなのか、という定義である。一応、教学上では三十二相八十種好を具すことが仏たりえる証拠となるが、この凡夫の肉体（分段身）を捨てずに相好を具す（変易身を得る）ことは、実は伝統的教学でも出来ないという「約束」である。即ち、「即身成仏」という用語は、そもそも二律背反な、あるいはクリティカルな矛盾をはらむ概念なのである。そして実は、極めて乱暴な言い方ではあるが、日本の仏教学史はこの矛盾をどうやって解決するか、という議論の歴史でもあった。

先ず即身成仏など（或いは成仏そのものが）あり得ない、という立場があり、教学的に解決しようとするもの、神秘力をもって解決しようとするもの、心の成仏を論ずるもの、凡夫の成仏を諦めて、他の浄土に生まれることにより仏の功德に与り救われようとするものなど、極めて多面的な議論が行われてきた。そしてそれらの議論の上に、吾祖の成仏論も成り立っている、ということである。

先に示した如く、我が宗門でもその目的を「即身成仏」と掲げるのであって、この問題を取り上げるとは意義無しとしまし。そこで「法華経を行じて即身成仏する」という命題に挑もうと思う。

なお、本稿は、中間報告的な覚え書きであって、南岳慧思から天台大師智顛の法華三昧を概観する。その後、天台の即身成仏論との関連、最澄の即身成仏論そのものや、その後の展開については別稿に譲る。よって、註など具備したのではないことを予め申し添えておく。

## 二、法華三昧の展開

「法華経を行じる」とは、一体どういうことなのであろうか。

我が宗門の実践門が、事行の唱題に収斂することは言うまでもないことであり、この点は改めて論じるべきものを持たない。法華経そのものに説かれる行法としては、五種法師、安樂行などが挙げられよう。そしてそれらを止揚す

る形で事行の唱題に収斂されているのが、我が宗の行法の肝要であろう。ひとまず、その辺りの議論はさて置くが、吾祖に到る以前にも、当然それに先行する種々の行法があったことはいままでもない。

「法華經を行じる」ことと「即身成仏する」こと、ここから当然我々は「妙法経力。即身成仏。」という成句を想起しよう。これは伝教大師最澄の最晩年の著作『法華秀句』（弘仁二年・八二二年）の「即身成仏化導勝八」がその典拠であり、吾祖も『女人成仏鈔』『聖愚問答鈔』『法華題目鈔』『妙法尼御前御返事』『千日尼御前御返事』『妙一女御返事』『三種教相』などに引く。更に宗祖は『秀句十勝鈔』を著し、本書には格段の注意を払っている。

筆者は曾て、即身成仏論について、天台と最澄を中心に検討したことがある。最澄は、当時の僧綱への対抗上、歴劫修行に対する大直道判を提示する。つまり、長い間かけないと成仏できないのは、その教えが遠回りの方便説だからであつて、真実であれば直道（近道）を通るが如く、すぐに成道できるはずだ、という主張であり、最晩年の『法華秀句』に到つて法華經こそ「即身成仏」を説く真実の教である、という議論を展開する。そしてその後の日本天台においては種々の即身成仏論が展開されることになる。当然それらは天台の教学でいかに消積するか、という命題に沿つたものである。殊に最澄説の特徴は、天台は『法華文句』堤婆達多品釈において龍女成仏を即身成仏と呼びそれを典型としたが、それを法華三昧による速疾成道を旨とする行法、その説示によつて解釈したもの、結びつけた点にあると言えよう。

ともあれ、「法華經は即身成仏を説く（それ故諸經に勝る）」（または「天台法華宗は即身成仏を説く（それ故他宗に勝る）」）という即身成仏論による教判は、最澄によつて明確化したと言えるのである。

さて近年、我が宗では、一部で『法華懺法』への関心が高まっている。『法華懺法』とは、『日蓮宗事典』によれば、法華三昧行法を中心とした自恣会（じしえ）のこと。天台が摩訶止観の中で説示した四種三昧の中の第三、半行半坐三昧で法華三昧行法を明らかにしたが、その法華三昧行法の中で中心肝要な部分を抽出し前後に伽陀を

加えたものが法華懺法である。法華懺法の中心は、懺悔と誦経とにあり、懺悔は文に「至心懺悔弟子某甲与法界衆生」とあるように、自己六根の罪過を懺悔すると共に、他の法界衆生の罪障を懺悔除滅するのである。誦経は六根の罪障を懺悔して身心清浄となった時、知経し誦経することによって「仏即我、我即仏」になり、三千実相の理によって仏我一体の念に達するの意がある。日蓮宗で行われている法華懺法は台家のそれと大差がなく、地域によって諸流の法華懺法の伝承を残している。（略）

という。「自恣会」とは、僧が自らの懺悔を為す法会のことである。

一般に『法華懺法』は、『例時作法』の阿弥陀供と共に天台寺院の日常の法要である。所謂「朝題目夕念仏」がこれであるが、『法華懺法』も『例時作法』も四種三昧の実践門から生じていることを確と意識しておくべきであろう。

法華三昧は、同様に『日蓮宗事典』の解説によれば以下の通りである。

（一）天台宗において、『法華経』・『観普賢菩薩行法経』に基づき、三七日（二十一日間）を期して行道・誦経し、実相中道の理を観ずる法をいう。方等三昧と共に半行半座三昧といい、天台所立の四種三昧の一つで、懺悔滅罪のためにも修せられる。智顛の『法華三昧懺儀』『摩訶止観』によれば、法華三昧は普賢の色身を見、釈迦及び分身の諸仏等を見、一切障道の罪を滅して、現身に菩薩の正位に入らんと欲する者の修するところで、三七日を期して法華経を誦誦し、その間に礼仏・懺悔・誦経・坐禅等を行じるのである。日本では最澄が始めて比叡山において修し、その後法華三昧堂が建設され常行三昧と共に諸寺で修された。この法は懺悔滅罪を主とするから法華懺法、または法華懺ともいわれる。（二）『法華三昧経』（智嚴訳）と『法華三昧懺儀』（智顛撰）を略称して『法華三昧』という。

行法に関しては、特にこれ以上付け加えるものはない。しかし、南岳慧思の法華三昧の発得や天台大師の大蘇開悟が法華三昧の前方便であったこと（後述）など検討すべき事項もあろう。またここで引かれた「現身入菩薩正位」の

「現身」は後の即身成仏論を想起させることも注意しておきたい。

ともあれ、まずは天台に先行する南岳慧思から検討して見ることにする。

## 1 南岳慧思

天台大師智顛の師である南岳慧思（五一五～五七七）は、禅法の行者・実践者であったと言える。

『天台智者大師別伝』によれば、

十年常誦。七載方等。九旬常坐。一時圓證。

（大正五〇・一九一頁下）

と賛嘆されるが、これは『南嶽思大禪師立誓願文』や『續高僧傳』の慧思伝にある通りであつて、殊に「一時圓證」は、

冬夏供養不<sub>レ</sub>憚<sub>二</sub>勞苦<sub>一</sub>。晝夜攝心理事籌度。訖<sub>二</sub>此兩時<sub>一</sub>未<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>證。又於<sub>二</sub>來夏<sub>一</sub>束<sub>レ</sub>身長坐繫<sub>レ</sub>念在<sub>レ</sub>前。

（略）又發<sub>二</sub>空定<sub>一</sub>心境廓然。夏竟受<sub>レ</sub>歲慨無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>獲目傷<sub>二</sub>昏沈<sub>一</sub>。生爲空過深懷<sub>二</sub>慚愧<sub>一</sub>。放<sub>レ</sub>身倚<sub>レ</sub>壁。背未至<sub>レ</sub>

間。霍爾開<sub>二</sub>悟法華三昧<sub>一</sub>。大乘法門一念明達。

（大正五〇・五六二頁下）

と、ある夏安居の際に空定を発したけれども、結局悟ることが出来なかつたため慚愧の念を懷いて、壁に身を投げて寄りかかろうとしたところ、背が壁につくまでの「わずかな瞬間に突然、法華三昧を開悟した」という事跡を表現したものである。

即ち慧思は、長きに互つて法華経等の經典の読誦と修禪を爲し、法華三昧の開悟・頓悟を実体験したわけである。

従つて、彼の法華経観は『法華經安樂行儀（以下、安樂行儀と略す）』冒頭に、

法華經者大乘頓覺。無<sub>レ</sub>師自悟。疾<sub>二</sub>成佛道<sub>一</sub>。一切世間難<sub>レ</sub>信法門。凡是一切新學菩薩。欲<sub>下</sub>求<sub>二</sub>大乘<sub>一</sub>超<sub>二</sub>過一

切諸菩薩<sub>一</sub>疾成<sub>中</sub>佛道<sub>上</sub>。須<sub>下</sub>持戒忍辱精進勤<sub>二</sub>修禪定<sub>一</sub>。專心勤<sub>中</sub>學法華三昧<sub>下</sub>。觀<sub>二</sub>一切衆生<sub>一</sub>皆如<sub>レ</sub>佛想。合掌

禮拜如<sub>レ</sub>敬<sub>二</sub>世尊<sub>一</sub>。亦觀<sub>二</sub>一切衆生<sub>一</sub>。皆如<sub>二</sub>大菩薩善知識<sub>一</sub>。想。勇猛精進求<sub>二</sub>佛道<sub>一</sub>者。如<sub>下</sub>藥王菩薩難行苦行。於<sub>二</sub>過去日月淨明德佛法中<sub>一</sub>。名爲<sub>中</sub>一切衆生喜見菩薩<sub>上</sub>。聞<sub>二</sub>法華經<sub>一</sub>精進求<sub>レ</sub>佛。於<sub>二</sub>一生中<sub>一</sub>得<sub>二</sub>佛神通<sub>一</sub>。

（大正四六・六九七頁下）

とある如く、法華經こそ疾成仏道の法門であるとの主張が込められ、その為には法華三昧を学べ、然らば一生の内に仏の神通を得ることができると勧められている。つまり、法華三昧が速疾成道の為の行法として勧められているわけである。

実際には『安樂行儀』は、法華三昧の行について「有相行」と「無相行」に分けて解説する。

無相行は、「安樂行品」により、深妙禪定を修して行住坐臥飲食語言等の一切の意義において、常に心を安定せしめる禪定行といえるが、有相行は「普賢菩薩勸発品（以下、勸発品と略す）」に説かれる行で、禪定を修せず三昧に入らず、散心に法華經誦誦に専念する誦誦行である。

有相行について、次の説示に注目したい。

復次有相行。此是普賢勸発品中。誦<sub>二</sub>法華經<sub>一</sub>散心精進。知<sub>是</sub>等人不<sub>レ</sub>修<sub>二</sub>禪定<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>入<sub>中</sub>三昧<sub>上</sub>。若坐若立若行。

一心專念<sub>二</sub>法華文字<sub>一</sub>。精進不<sub>レ</sub>臥如救頭然。是名<sub>二</sub>文字有相行<sub>一</sub>。此行者不<sub>レ</sub>顧<sub>二</sub>身命<sub>一</sub>。若行成就即見<sub>下</sub>普賢金

剛色身乘<sub>二</sub>六牙象王<sub>一</sub>住<sub>中</sub>其人前<sub>上</sub>。以<sub>二</sub>金剛杵<sub>一</sub>擬<sub>二</sub>行者眼<sub>一</sub>。障道罪滅。眼根清淨得<sub>下</sub>見<sub>二</sub>釋迦<sub>一</sub>。及見<sub>二</sub>七佛<sub>一</sub>。

復見<sub>中</sub>十方三世諸佛<sub>上</sub>。至心懺悔。在<sub>二</sub>諸佛前<sub>一</sub>五體投<sub>レ</sub>地。起<sub>合</sub>掌立。得<sub>二</sub>三種陀羅尼門<sub>一</sub>。一者總持陀羅尼。

肉眼天眼菩薩道慧。二者百千萬億旋陀羅尼。具<sub>二</sub>足菩薩道種慧法眼清淨<sub>一</sub>。三者法音方便陀羅尼。具<sub>二</sub>足菩薩一

切種慧佛眼清淨<sub>一</sub>。是時即得<sub>レ</sub>具<sub>二</sub>足一切三世佛法<sub>一</sub>。或<sub>二</sub>一生修行得<sub>二</sub>具足<sub>一</sub>。或<sub>二</sub>二生得<sub>一</sub>。極大遲者三生即得。若

顧<sub>二</sub>身命<sub>一</sub>貪<sub>二</sub>四事<sub>一</sub>供養不<sub>レ</sub>能動修。經<sub>レ</sub>劫不<sub>レ</sub>得。是故名爲<sub>二</sub>有相<sub>一</sub>也。

（大正四六・七〇〇頁上中）

即ち有相行が成就するとき、六牙百象に乗ずる普賢菩薩の像相を見て、眼根清淨を得て釈迦諸仏に見え、更に至心に

懺悔し五体投地し、立つて合掌すれば三種陀羅尼を得ると言う。

勧発品から説き起こしているが、後半は『観普賢菩薩行法經』（以下、観普賢經と略す）による。「至心懺悔」をいうのは、『観普賢經』の「一切業障海。皆從妄相生。若欲懺悔者。端坐念實相。衆罪如霜露。慧日能消除。是故應至心。懺悔六情根。」（大正九・三八九頁下）を当然想起させるし、また同じく

阿難。若比丘比丘尼優婆塞優婆夷。天龍八部一切衆生。誦大乘經者。修大乘者。發大乘意者。樂見普賢菩薩色身者。樂見多寶佛塔者。樂見釋迦牟尼佛及分身諸佛者。樂得六根清淨者。當學是觀。此觀功德除諸障礙。見上妙色。不入三昧。但誦持故。專心修習。心心相次。不離大乘。一日至三七日。得見普賢。有重障者。七七日盡然後得見。復有重者一生得見。復有重者二生得見。復有重者三生得見。

（大正九・三八九頁下）

と、それぞれの傍線部が対応するように、『観普賢經』の説示を踏襲するものとなっている。当然『法華經』の結經としての位置を占める『観普賢經』と、『法華經』内の「勧発品」の関連は法華三昧、速疾成仏、六根清淨、懺悔、普賢菩薩、三生説といったキーワードを巡って密接に関連する点に留意するべきであって、これはそのまま天台に引き継がれることとなる。

## 2 天台大師智顛

### ・大蘇開悟

慧思の法華三昧は智顛に受け継がれるが、そもそも慧思と智顛は、当初から法華三昧を巡って密接に関わっている。これは「大蘇開悟」の一件についてであるが、『天台智者大師別傳』には

時有「慧思禪師」。武津人也。（略）思曰。昔日靈山同聽「法華」。宿縁所追今復來矣。即示「普賢道場」爲説

四安樂行<sup>一</sup>。

（大正五〇・一九一頁下）

とある。

慧思は、危険を冒して光州大蘇山まで訪ねてきた智顛を「昔靈山浄土で共に法華経を聞いた仲であって、今またその宿縁が再来した」と悦び、「普賢道場」を示して「四安樂行」を説いたと言うのだから、無相・有相の法華三昧の両行を示したわけである。

そして智顛は慧思の下で真摯に法華三昧に励む。

經二七日「誦至藥王品諸佛同讚是真精進是名眞法供養」。到此一向身心豁然寂而入定。（略）思師歎曰。非爾弗證。非我莫識。所入定者法華三昧前方便也。所發持者初旋陀羅尼也。縱令文字之師。千群萬衆。

尋汝之辯。不可窮矣。於説法人中。最爲第一。（大正五〇・一九一頁下～一九二頁上）

法華経を誦して遂に十四日を経て、藥王菩薩本事品の「諸佛同讚是真精進是名眞法供養」に到った時、智顛は豁然として大悟する。この悟りを慧思は「法華三昧の前方便」であって、「勸発品」の三陀羅尼中の最初の旋陀羅尼（『安樂行儀』には「總持陀羅尼」と言ったわけである<sup>△</sup>）。

即ち、智顛は当初から法華三昧を行じ、実際にその証得を体験している点は注意を要する。これ以降、彼が展開する止観などの体系は、実際の宗教体験に基づいているという視点を欠いてはなるまい。

・智顛の法華三昧

智顛はその独自の宗教体験から詳細な修行体系、行位論、教学体系を構築するが、法華三昧は『摩訶止観』においては第七正修止観章の十境十乘観法ではなく、第一大意章の五略中の二「修大行」中に略行として、四種三昧の半行半坐三昧の一部として取り扱われる。



智顛の法華三昧は、慧思に比べると有相無相の別を立てず（ただし「南岳師云。有相安樂行。無相安樂行。豈非下就三事理得中如レ是名上。（大正四六・一四頁上）」と有相無相を事理に配当する）、慧思が安樂行品による禪定<sup>11</sup>無相行を重視したのに対し、『観普賢經』を重視し（『法華三昧懺儀』の冒頭に「隋瓦官寺沙門釋智顛。輒采<sup>12</sup>法華普賢觀經及諸大乘經意<sup>13</sup>撰<sup>14</sup>此法門<sup>15</sup>。」と観普賢經と法華經を対等と扱う）、その「端坐念<sup>16</sup>實相<sup>17</sup>」や「勸発品」の「坐思<sup>18</sup>惟此經<sup>19</sup>」に着目して、諸法の空・如・実相を觀することが法華經を貫く行法と見た点に違いがある。<sup>20</sup>

『摩訶止観』には

約<sup>21</sup>法華<sup>22</sup>亦明<sup>23</sup>方法<sup>24</sup>勸<sup>25</sup>修<sup>26</sup>。方法者。身開遮。口説默。意止觀。

身開爲十。一嚴淨道場。二淨身。三三業供養。四請佛。五禮佛。六六根懺悔。七遶旋。八誦經。九坐禪。十證相。別有<sup>27</sup>一卷<sup>28</sup>名<sup>29</sup>法華三昧<sup>30</sup>。是天台師所<sup>31</sup>著流<sup>32</sup>傳於世<sup>33</sup>。行者宗<sup>34</sup>之。此則兼<sup>35</sup>於説默<sup>36</sup>。不<sup>37</sup>復別論<sup>38</sup>也。

意止觀者。普賢觀云專誦<sup>39</sup>大乘<sup>40</sup>不<sup>41</sup>入<sup>42</sup>三昧<sup>43</sup>。日夜六時懺<sup>44</sup>六根罪<sup>45</sup>。安樂行品云。於<sup>46</sup>諸法<sup>47</sup>無<sup>48</sup>所<sup>49</sup>行<sup>50</sup>。亦不<sup>51</sup>行<sup>52</sup>不<sup>53</sup>分別<sup>54</sup>。  
（大正四六・一四頁上）

と「意止観」のみを説いて（法華經の専心誦誦と日夜の六根懺悔）、「身開遮」と「口説默」を更に「法華三昧」という別の一巻『法華三昧懺儀』にその解説を譲るとされている。

その『法華三昧懺儀』には行法としての法華三昧の目的を「明三七日行法華懺法勸修第一」に以下のように説く。

如來滅後。後五百歲濁惡世中。比丘比丘尼優婆塞優婆夷。誦<sup>55</sup>大乘經<sup>56</sup>者。欲<sup>57</sup>修<sup>58</sup>大乘行<sup>59</sup>者。發<sup>60</sup>中<sup>61</sup>大乘意<sup>62</sup>者。欲<sup>63</sup>見<sup>64</sup>普賢菩薩色身<sup>65</sup>者。欲<sup>66</sup>見<sup>67</sup>釋迦牟尼佛多寶佛塔分身諸佛及十方佛<sup>68</sup>者。欲<sup>69</sup>得<sup>70</sup>六根清淨<sup>71</sup>入<sup>72</sup>佛境界通達<sup>73</sup>無碍<sup>74</sup>者。欲<sup>75</sup>得<sup>76</sup>聞<sup>77</sup>十方諸佛所説<sup>78</sup>。一念之中悉能受持通達不<sup>79</sup>忘<sup>80</sup>。解釋演説無障碍<sup>81</sup>者。欲<sup>82</sup>得<sup>83</sup>與<sup>84</sup>文殊師利<sup>85</sup>普賢等諸大菩薩<sup>86</sup>共爲<sup>87</sup>等侶<sup>88</sup>者。欲<sup>89</sup>得<sup>90</sup>普現色身<sup>91</sup>一念之中不<sup>92</sup>起<sup>93</sup>滅定<sup>94</sup>。遍至<sup>95</sup>十方一切佛土<sup>96</sup>供<sup>97</sup>養<sup>98</sup>一切諸佛<sup>99</sup>者。欲<sup>100</sup>得<sup>101</sup>一念之中遍到<sup>102</sup>十方一切佛刹<sup>103</sup>。現<sup>104</sup>種種色身<sup>105</sup>作<sup>106</sup>種種神變<sup>107</sup>。放<sup>108</sup>大光明<sup>109</sup>説法度<sup>110</sup>脱<sup>111</sup>一切衆生<sup>112</sup>。

入<sub>中</sub>不思議一乘上者。欲<sub>レ</sub>得<sub>下</sub>被<sub>二</sub>四魔<sub>一</sub>。淨<sub>二</sub>一切煩惱<sub>一</sub>。滅<sub>二</sub>一切障道罪<sub>一</sub>。現身入<sub>二</sub>菩薩正位<sub>一</sub>。具<sub>中</sub>一切諸佛自在功德上者。先當<sub>下</sub>於<sub>二</sub>空閑處<sub>一</sub>。三七日一心精進入<sub>中</sub>法華三昧上。若有<sub>下</sub>現身犯<sub>二</sub>五逆四重<sub>一</sub>失<sub>中</sub>比丘法上。欲<sub>下</sub>得<sub>二</sub>清淨還具<sub>一</sub>沙門律儀<sub>一</sub>。得<sub>レ</sub>如<sub>中</sub>上所<sub>レ</sub>說種種勝妙功德上者。亦當<sub>下</sub>於<sub>二</sub>三七日中<sub>一</sub>。一心精進修<sub>中</sub>法華三昧上。所以者何。此法華經是諸如來祕密之藏。於<sub>二</sub>諸經中<sub>一</sub>最在<sub>二</sub>其上<sub>一</sub>。行<sub>二</sub>大直道<sub>一</sub>無<sub>二</sub>留難<sub>一</sub>故。如<sub>二</sub>轉輪王髻中明珠<sub>一</sub>不<sub>二</sub>妄與<sub>レ</sub>人。若有<sub>レ</sub>得者隨<sub>二</sub>意所<sub>レ</sub>須<sub>一</sub>種種珍寶悉皆具足。法華三昧亦復如<sub>レ</sub>是。能與<sub>二</sub>一切衆生佛法珍寶<sub>一</sub>。是故菩薩行者。應<sub>下</sub>當不<sub>レ</sub>計<sub>二</sub>身命<sub>一</sub>。盡未來際修<sub>中</sub>行此經上。況<sub>二</sub>三七日耶<sub>一</sub>。（大正四六・九四九頁中下）

種々の功德を述べるが、現身に菩薩の正位に入りたければ、三七日の法華三昧を一心に精進せよ、というのであり、その理由は、法華經は諸々の如來の祕密の藏であり、諸經中の最上であつて大直道（近道）で安全な道であるからである（大直道については最澄の項でも採り上げる）。速疾成道の行法としての主張は、慧思より受け継がれているわけである。

さて、先に述べた通り、『摩訶止観』では「身開遮」と「口説黙」を本書に譲っている。即ち「身開爲<sub>レ</sub>十。一嚴淨道場。二淨身。三三業供養。四請佛。五禮佛。六六根懺悔。七遶旋。八誦經。九坐禪。十證相。」は『法華三昧懺儀』の「明初入道場正修行方法第四」中の条文に合致する。

明三七日行法華懺法勸修第一。

明三七日行法前方第二。

明正入道場三七日修行一心精進方法第三。

明初入道場正修行方法第四。

第一明行者嚴淨道場法。

第二明行者淨身方法。

第三明行者修三業供養法。

第四明行者請三寶方法。

第五明讚歎三寶方法。

第六明禮佛方法。

第七明懺悔六根及勸請隨喜迴向發願方法。

第八明行道法。

第九重明誦經方法。

第十明坐禪實相正觀方法。

略明修證相第五。

即ち、智顗は法華經読誦に懺悔の儀制を加え、法華三昧に礼拝・懺悔・行堂・誦經・座禪といった三七日の行法を組織立てた。よって『法華三昧懺儀』は、法華三昧の所作や準備、方法、口唱の内容などを記した儀礼書の性格を強く持つようになり広く世に行われるようになる。

流行するにつれ、法華三昧は、次第に儀礼化する。『法華三昧懺儀』では詳しく意義を説明している部分も、妙楽湛然の『法華三昧行事運想補助儀』（大正四六・No.1942）や現行伝わる『法華懺法』（大正七七・No.2417）などに到るとより簡略化され、殊に『法華懺法』はほぼ式次第そのものである。更に四明知礼に擬せられる『禮法華儀式』（大正四六・No.1944）<sup>(10)</sup>などは一応「六根懺悔」の文言はあるものの、極めて簡略化された法華經贊嘆の儀式となっている。

### 3 伝教大師最澄

「法華三昧」は「法華懺」の異名ある通り、懺悔滅罪が一つのテーマとなる。最澄以前においても、国分尼寺が具称「法華滅罪之寺」と言う通り、日本では法華経が懺悔滅罪の經典であることが承知されていたし、尼寺に法華経を任じたのは女人成仏が説かれるから、等とも言われる。

最澄の即身成仏論については別稿に譲るが、最澄が法華三昧をいかに取り扱ったかをまとめておきたい。

叡山天台が止観・遮那の両業、つまり顕密兼修を宗旨とすることは説明するまでもないことであるが、先ず『天台法華宗年分縁起』には

天台業二人 一人令讀大毘盧遮那經。一人令讀摩訶止觀。

（伝全一・七頁）

とあり、『摩訶止観』を「修行させる」でなく「読ませる」としている点が注目される。そして、やや性格の違う資料であるが、六年後の『長講法華經式』には

一行一切行 恒修三四三昧 長講法華經 恒說一切經

（伝全四・二五八頁）

と、四種三昧と法華経の長講をさせていることが垣間見られるようになる。そして更に六年後の『六条式』には

凡止観業者。年年毎日。長轉長講法華金光仁王守護諸大乘等護國衆經。

（伝全一・一二頁）

と法華経や護国經典の長轉長講が制度化され、同じく『八条式』には

凡此宗得業者。得度年。即令受大戒。受大戒竟。一十二年。不出山門。令勤修學。初六年聞慧爲正。思修爲傍。一日之中。二分内學。一分外學。長講爲行。法施爲業。後六年思修爲正。聞慧爲傍。

止観業。具令修習四種三昧。

（伝全一・一四頁）

と、十二年籠山の制を敷き、後の六年間に四種三昧を実修させることになった。そして『四条式』には

今天台法華宗。年分學生。並回心向大初修業者。一十二年。令住深山四種三昧院。

と、その住居を「四種三昧院」とし、そして朝廷へ上表する『顯戒論』には、これらを踏まえて

(伝全一・一六～一七頁)

摩訶止觀業。置<sub>二</sub>四三昧院<sub>一</sub>。修<sub>二</sub>練止觀行<sub>一</sub>。常爲<sub>レ</sub>國轉<sub>レ</sub>經。

(伝全一・一三一頁)

と、いい、『上顯戒論表』に

謹以<sub>二</sub>弘仁十一載歲次庚子<sub>一</sub>。爲<sub>レ</sub>傳<sub>二</sub>圓戒<sub>一</sub>。造<sub>二</sub>顯戒論三卷<sub>一</sub>。佛法血脈一卷<sub>一</sub>。謹進<sub>二</sub>陛下<sub>一</sub>。重願天台圓宗  
兩業學生。順<sub>二</sub>所傳宗<sub>一</sub>。授<sub>二</sub>圓戒<sub>一</sub>。稱<sub>二</sub>菩薩僧<sub>一</sub>。勤<sub>二</sub>菩薩行<sub>一</sub>。一十二年。不<sub>レ</sub>出<sub>二</sub>叡山<sub>一</sub>。四種三昧。令<sub>レ</sub>  
得<sub>二</sub>修練<sub>一</sub>。然則。一乘戒定。永傳<sub>二</sub>本朝<sub>一</sub>。山林精進。

(伝全一・二五六頁)

と「十二年籠山」と「四種三昧」の修練を上表して、公式に一山の制度としたわけである。

この件について、我が淺井圓道は「止觀正修章の十境十乘の觀法は止觀大意章の四種三昧によつて超克された」と表現している。

最澄が「四種三昧」を重視したことは如上明らかであるが、例えば有名な『守護國界章』「彈謗法者大小交雜止觀章第十三」には

其修行道。亦有<sub>二</sub>迂回・歷劫・直道<sub>一</sub>。其修行者。步行迂回道。步行歷劫道。飛行無礙道。飢食者所<sub>レ</sub>示多分小  
乘止觀者。相<sub>二</sub>似步行迂回道<sub>一</sub>。又多分菩薩止觀者。相<sub>二</sub>似步行歷劫道<sub>一</sub>。此<sub>二</sub>步行道<sub>一</sub>。有<sub>レ</sub>教無<sub>二</sub>修人<sub>一</sub>。當今  
人機。皆轉變。都無<sub>二</sub>小乘機<sub>一</sub>。正像稍過已。末法太有<sub>レ</sub>近。法華一乘機。今正是其時。何以得<sub>レ</sub>知。安樂行品  
末世法滅時也。今四安樂行。三入著坐行。六牙白象觀。六根懺悔法。般若一行觀。般舟三昧行。方等眞言行。  
觀音六字句。遮那胎藏等。如<sub>レ</sub>是直道經。其數有<sub>二</sub>無量<sub>一</sub>。今現修行者。得<sub>レ</sub>道不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>數。

(伝全二・三四八～三四九頁)

と、末法の人機（法華一乘機）相應の大直道の行として四安樂行・三入著坐行・六牙白象觀・六根懺悔法を挙げてい

る。<sup>(二二)</sup>同様に、『法華秀句』「普賢菩薩勸發勝十」にも

當レ知。法華經力故。後世後五百歲。圓機四衆等。於三七日中。得レ見普賢身。亦得レ聽聞示教利喜。他宗所依經。都無レ勸發。天台法華宗。具有レ此勸發。  
(伝全三・二七六頁)

當レ知。如來滅後。後五百歲。受レ持讀誦法華經者。速成レ佛果。度レ脫衆生。他宗所レ依經。都無レ有レ速成勸。天台法華宗。具有レ速成勸。  
(同・二七七頁)

爲レ傳二妙法一乘宗一 隨レ分敬造二十勝文一 無相妙法無二是非一

隨機說法有二權實一 法華本法待二時機一 體内權實内證境

今舉二十勝二示二後學一 以二此傳法諸功德一 慧二施謗法謗人者一

先成二佛道 利二衆生一 一覽二斯文一 諸衆生 三生畢竟入二正位一 (同・二七九〜二八〇頁)

と末法機根相應の速成仏果の経として法華経を、更に普賢觀（法華三昧）を示していることは特記しておきたい（但し、末法時期の意識は早くも南岳慧思にも見える）。

#### 4 法華懺法について

本稿冒頭、『法華懺法』について触れたので、やや本来の趣旨からは外れるが、本朝における「法華懺法」にも簡略に付言しておきたい。

最澄は、「四種三昧」の一つとして、末法相應の行として法華三昧を勧めたことは如上明らかであるが、「法華三昧」に限れば、例えば一乗忠の『叡山大師傳』には

弘仁三年七月上旬。造<sub>レ</sub>法華三昧堂<sub>一</sub>。簡<sub>レ</sub>淨行衆五六以上<sub>一</sub>。晝夜不<sub>レ</sub>絶。奉<sub>レ</sub>讀<sub>レ</sub>法華大乘經典<sub>一</sub>。然弘誓之力。盡<sub>レ</sub>於後際<sub>一</sub>。善根之功。覆<sub>レ</sub>於有情<sub>一</sub>。可<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>美歎。  
(伝全五・附録二八頁)

との記録があり、『天台座主記』にも

弘仁三年七月建<sub>二</sub>立法華堂<sub>一</sub>。於<sub>三</sub>此地<sub>一</sub>始<sub>三</sub>三昧行法<sub>一</sub>。四季之懺法<sub>一</sub>。

(『天台座主記』校訂増補版・四頁)

との記録があり、懺法開始したように読める。しかし、一般に「法華懺法」の創始は円仁に帰せられることが多い。即ち『慈覺大師傳』に

嘉祥元年春。奉 詔入京。即登<sub>三</sub>本山<sub>一</sub>。禮<sub>二</sub>拜師跡<sub>一</sub>。於<sub>レ</sub>是僧徒成<sub>レ</sub>雲。言泗如<sub>レ</sub>雨。隨喜讚歎。禮<sub>二</sub>拜諸尊曼荼羅<sub>一</sub>。親披<sub>二</sub>閱眞言儀軌<sub>一</sub>。大師於<sub>レ</sub>是始<sub>二</sub>改傳法華懺法<sub>一</sub>。先師昔傳<sub>三</sub>其大綱<sub>一</sub>。大師今弘<sub>二</sub>此精要<sub>一</sub>。

(『續天台宗全書』史伝二・六七頁上)

「改伝」とは、そもそも「法華懺法」に関する資料の将来は鑑真にまで溯り、既に最澄も『法華三昧懺儀』を将来しているのであるが、それを改めて伝えたとの謂である。円仁が五台山から持ち来ったものは、式次第はほぼ同じであるが、懺法は略式となっており、『慈覺大師傳』の記述「先師昔傳<sub>三</sub>其大綱<sub>一</sub>。大師今弘<sub>三</sub>此精要<sub>一</sub>。」とは逆であつて、法華三昧の易行化を推し進めた形となつている。<sup>(一五)</sup>

何れにせよ現在にも伝えられ、行われている『法華懺法』は円仁将来、或いは円仁創始とされるが、日本においても、一層儀式の色彩が強くなつてゐる。

### 三、まとめにかえて

如上、法華三昧及び即身成仏論について若干の検討を加えたが、まだこの最澄説の段階では種々の矛盾をはらんでいることを指示しておく。例えば、その得果あるいは成仏の階位の問題がそれである。

法華三昧では六根清浄がその得果となるが、これは天台教学上では相似即であって、ここまでは分段生死の範疇内である。即ち、それを成仏と呼んでいいのかどうか、という問題がある。また初住以上が聖道という天台教学の約束があるが、分段身を以て入住できるのか、という両面の問題があるのである。

これは天台の中に「超登十地」「十地虎狼」「一生登地」といった命題が隠されているわけで、やがてこれが発見され、整理されていくことになるが、成仏の位階を下げるのか、或いは分段身の得果を引き上げるのか、或いは即身成仏といながら隔生成仏を認めるのか、といった問題が最澄以降に噴出し、その解決に腐心することになる。

特に分段身の捨不捨を論ずれば必ず隔生成仏に赴かねばならず、日本天台はその解決のためにも遮那業を中心として真言教学に傾倒して行く。

例えば安慧は『愍諭辨惑章』の「示即身成佛文」に『菩提心論』から三例を引く。殊に「唯眞言法中。即身成佛。故是說三摩地法。於三諸教中。闕而不書。」を採用する。本書は円仁も顧みることなく、円珍も『些々疑問』中で、菩提心論或云龍樹造。或云興善故三藏集。此未決解。私謂後説爲正。此義如何。

（智証大師全集三・一〇三八頁上）

といい、不空の編集を主張して龍樹作を否定したにも拘わらず、である。ここに至って、明らかに最澄説からの離脱が見られる。

一方、吾祖は例えばこの『菩提心論』に関して、『太田殿女房御返事』に

即身成仏の手本たる法華経をば指をいて、あとかたもなき真言に即身成仏を立て、剩唯の一字ををかる、條、

天下第一の僻見也。此偏修羅根性法門なり。天台智者大師の文句九に、寿量品心釈云仏於三世等有三身於諸教中秘之不伝とか、れて候。此こそ即身成仏の明文にては候へ。不空三藏此釈を消が為に事を龍樹に依て、唯真

言法中即身成仏故是說三摩地法於諸教中闕而不書とか、れて候也。されば此論次下に、即身成仏をか、れて候



が、あへて即身成仏にはあらず。生身得忍に似て候。

(定本二・一七五六～一七五七頁)

と真言の即身成仏は生身得忍(相似即)と断じ、しかも、この文の問題点を指摘するのに『法華文句』の壽量品釈  
秘密者。一身即三身名爲<sub>レ</sub>秘。三身即一身名爲<sub>レ</sub>密。又昔所<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>説名爲<sub>レ</sub>秘。唯佛自知名爲<sub>レ</sub>密。神通之力者。

三身之用也。神是天然不動之理。即法性身也。通は無壅不思議。即報身也。力是幹用自在。即應身也。仏  
於<sub>二三</sub>三世<sub>二</sub>等有<sub>三</sub>三身<sub>一</sub>。於<sub>三</sub>諸教中<sub>一</sub>秘<sub>レ</sub>之不<sub>レ</sub>伝。  
(大正四六・一二九頁下)

を引き、「唯真言法中即身成仏故是説三摩地法於諸教中闕而不書」の句はこの『法華文句』の「於諸經中秘之不伝」  
を消すために龍樹に寄せて作ったのだ、と言う。しかし吾祖の真骨頂は、法華經の即身成仏の明文を、これまでの堤  
婆達多品の龍女成仏から壽量品に見出した点である。言うまでもなく一念三千論は吾祖の成仏論の基であるが、これ  
を壽量品の「文底」から見出したことによつて、それまでの仏身論や位階論などの議論を超克してしまふのである。

近年、大正大学の故・塩入良道氏の博士学位論文が『中国仏教における懺法の成立』として刊行された。<sup>(二八)</sup> 本稿にお  
ける問題点、南岳慧思、天台智顛の法華三昧・法華懺法は網羅されている。しかしその「むすび」において「第十章  
の懺法の日本の需要が、一応むすびの内容である。ここに到るまでには、まだ残された手続きがあるが、その前に資  
料の検討という量的作業があつたため、その手続きを超えて日本の需要を論ぜざるを得なかつた」と告白する如く、  
日本における懺法の解明はまだ中途であるといえよう。

『法華懺法』が関心を集めるのは、吾宗の伝統に則れば、意義のあることである。しかし、何故吾祖が唱題を見出  
したか、『法華懺法』が何のためのものなのか、その来歴を確と認識しておくべきであらう。

(平成二十一年三月一日脱稿)

(一) 『即身成仏』の用語そのものは、最澄以前には妙楽湛然の『法華文句記』の堤婆達多品釈、不空訳『金剛頂瑜伽中発阿耨多羅三藐三菩提心論』に見られる。また頃年が不詳なのでその前後を論じるのは難しいが、最澄と同期にこの用語を用いたものは、空海の『即身成仏儀』及び徳一の『真言宗未決文』がある。

(二) 『法華秀句』即身成仏化導勝八（『伝教大師全集（以下「伝全」と略す）」第四卷・二六六頁）伝全本では「妙法」経力ヲ以テ即身成仏」と訓じている。

(三) 『女人成仏鈔』（『昭和定本日蓮聖人遺文（以下「定本」と略す）」第一卷・三三五頁）、『聖愚問答鈔』（定本一・三八九頁）、『法華題目鈔』（定本一・四〇四頁）、『妙法尼御前御返事』（定本二・一五二八頁）、『千日尼御前御返事』（定本二・一五四一頁）、『妙一女御返事』（定本二・一七七七頁、一七八一頁）、『三種教相』（定本三・二二五〇頁）。

(四) 『秀句十勝鈔』（定本三・二二七五頁）弘安元年（一二七二年）の著述に比定されている。

(五) 拙稿「最澄の即身成仏論について」（『立正大学大学院年報 第十一号』平成六年三月）

(六) 『無量義経』の「善男子。自我道場菩提樹下端坐六年。得成阿耨多羅三藐三菩提。以佛眼觀一切諸法不可宣説。所以者何。以諸衆生性欲不同。性欲不同種種説法。種種説法以方便力。四十餘年未曾顯實。是故衆生得道差別。不得疾成無上菩提。」（大正九・三八六頁上中）「若有衆生得聞是經。則爲大利。所以者何。若能修行。必得疾成阿耨多羅三藐三菩提。其有衆生不得聞者。當知是等爲失大利。過無量無邊不可思議阿僧祇劫。終不得成阿耨多羅三藐三菩提。所以者何。不知菩提大道直。故行於險徑。多留難。故。略善男子。我説是經甚深甚深眞實甚深。所以者何。令衆疾成阿耨多羅三藐三菩提。故。一聞能持一切法。故。於諸衆生大利益故。行大道直。無留難。故。（同・三八七頁上中）」からも方便説法は速疾成道できない。眞實教は速疾成道するという教判が導き出される。これは『守護國界章』『法華秀句』『顯戒論』『法華去惑』『決権実論』『上顯戒論表』『授菩薩戒儀』等に散見される。

(七) 当然この主張は批判される。例えば、『真言宗未決文』（『大正新修大藏經（以下、「大正」と略す）」第七七卷・八六二

頁)における空海の密教義の即身成仏論に対し、徳一は第三疑「即身成仏疑」において「行不具失」と「闕慈悲失」があると批判する。「行不具失」とは、通常、成仏するためには、発菩提心してから成仏するまで三祇百劫の間、菩薩行として「六波羅蜜行」(布施・持戒・忍辱・精進・禪定・般若)を修する必要がある、その間、階梯としては十住・十行・十回向・十地・等覺・妙覺と経なければならぬ。しかし、真言宗ではこのうちの禪定行しか要求されないから、行が具備していないと批判する。また「闕慈悲失」とは、「六波羅蜜行のうち、布施行を行じない結果、慈悲を顕現できない。そもそも菩薩は一切衆生を救ってから成仏するものであって、これでは大乘仏教の核心を欠いている」という批判であるが、本来即身成仏論を主張する立場にあるものは、全てこの批判に答えて行かなければならぬ。

(八) 佐藤哲英は、この三陀羅尼は『法華文句』によれば旋仮入空、旋空出假、得入中道第一義諦に配されており、初旋陀羅尼の発得は「旋仮入空」即ち空觀の証得を意味し、それは法華の中道実相觀の前提たる空の証悟であるから、法華三昧の前方便と言ったのであろう、と説明している。(『天台大師の研究』百華苑・昭和三十六年・三二頁)

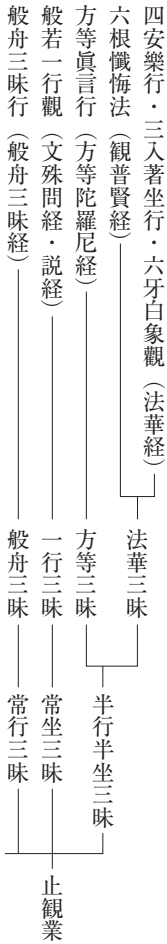
(九) 同・一三六頁

(一〇) 知礼に擬せられるも大正藏他諸版もその名を出さない。『佛書解説大辞典』には「本書は法華三昧の略作法である。(略)本書は法華経を贊嘆して経を礼拝するだけの儀式であることが法華三昧と相違している点であり、また頗る簡単な儀式であるといえる」と解説する。現在、身延山で行じられる「禮法華儀式」がいつ始まったのか未検である。

(一一) 浅井圓道『上古日本天台本門思想史』(平樂寺書店・昭和五十年)二〇五頁

(一二) 同・二〇六頁

浅井は以下のように図示している。



観音六字句（請観音経）—— 随意三昧—— 非行非坐三昧——  
遮那胎藏（大日経）—— 遮那業

- (二三) 『唐大和上東征傳』に「行法華懺法一卷」（大正五一・九九三頁上）と見える。
- (二四) 『台州録』に「妙法蓮華經懺法一卷 或名三昧行法。智者大師出一十八紙。」（大正五五・一〇五五頁中）とある。
- (二五) 浅井前掲書・三七二頁
- (二六) 同・五八四頁
- (二七) 言うまでもなく『開目鈔』の「一念三千の法門は但法華経の本門寿量品の文の底にしづめたり。龍樹天親知て、しかもいまだひろいささず。但我が天台智者のみこれをいだけり。（定本一・五三九頁）」である。
- (二八) 塩入良道『中国仏教における懺法の成立』（大正大学天台学教室・平成十九年三月）
- (二九) 同・八三八頁